

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 9 月 2 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ドイツ、オーストリア、ポルトガル、イギリス
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ヨーロッパ自主企画 (学会参加、野生馬観察、ラボ見学)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 21 日 - 8 月 10 日
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Vienna 大 : Thomas Bugnyar 博士、Oxford 大 : 狩野文浩博士、Maxplanc : Christopher Krupenye 博士。
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果 : 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
このたび、Behaviour2017 への参加に合わせて、ラボ見学及び野生馬観察をおこなったのでここに報告する。
＝日程＝ 7/21 移動 7/22 ①マックスプランク研究所見学 7/23 移動 7/24-25 ②ウィーン大学見学 7/26 移動 7/27-29 ③野生馬観察・乗馬 7/30 移動 7/31-8/4 ④学会参加 8/5 移動 8/6-8/9 ⑤オックスフォード見学 8/10 移動
＝①マックスプランク研究所＝ ライプツィヒ動物園を Christopher 博士に案内していただいた。最初に、研究ステーションを見学した。広大な放飼場を上から観察できる研究者のための観察場などは優れていると感じた。ライプツィヒ動物園にはゴリラ、オランウータン、チンパンジー、ボノボと大型類人猿 4 種すべてが飼育されている。休日ということもありあつという間に人だかりとなったが、一般の入園者よりも少しだけ早く入らせてもらったので幸いじっくり見ることができた。また朝のうちは動きも活発なので見ていて飽きなかった。特筆すべきなのはすべての種に赤ちゃんがいたことである。たいてい常に赤ちゃんがいるらしい。育児放棄された赤ちゃんを養子にとって自分の子どもと一緒に育てているボノボもいた。11 時から来園者にも公開されているオランウータンの実験を見学した。確率予測についての実験だった。赤ちゃん連れのオランウータンも赤ちゃんを抱いて実験に参加していた。自分の目で見たわけではないものの、霊研でもかつて、赤ちゃんを連れて母親のチンパンジーが実験に参加していたことを思い出した。発達の種比較も可能であることは大きな利点だと思った。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



類人猿放飼場の観察台からの眺め



オランウータンの実験の様子



大型類人猿4種の母子

＝②ウィーン大学＝

1日目はキャンパス内のオナガ (Azure-winged Magpie) やコモンマーモセットを見せて頂いた。コモンマーモセットの施設は霊長類研究所の施設のアイデアを取り入れたということで、見慣れたチンパンジー通路のかなり小さいものがコモンマーモセット用に取り付けられていたのが新鮮だった。マーモセットはグループ飼育で自由に室内外を行き来できる大きなケージに暮らしており、エンリッチメントもしっかり実施されているという印象だった。2日目は少し離れたリサーチステーションでカラス (Raven, Crow) やオウムなどの施設を見学した。見ていると、Ravenが目の前で貯食をした。ただし小石を小石の中に隠しており、普通はおとなは餌ではない小石を隠したりはしないそうだが、子どもがそばで見ているためわざとそうしたのはとのことだった。貯食行動はよく取り上げられるものの、実際に目にしたのは初めてだった。タッチパネルはもちろん、この施設には鳥類の声を録音してプレイバック実験ができるような実験室もあり、その際の心拍なども測れるとのことで、比較認知科学の実験パラダイムの

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

手法は少なくとも理論上はほとんどすべて鳥類でもおこなえるのではと感じた。Ravenなどは貯蓄などの行動も面白く、鳥類が盛んに研究されていることにも頷けた。腕にravenをとまらせてもらえたのもまじまじと見るのができ良い経験だった。



フィールドステーション内の別の建物の写真。実際に見学した施設をネット上にあげるのには差し控える。

＝③野生馬観察・乗馬＝

調査地のポルトガル、ヴィアナ・ド・カステロでは野生ウマ (Garrano) が多数生息しており、ドローンを用いた個体間関係の研究がおこなわれている。本実習では馬を観察しつつトレッキングをしたりドローンの練習をしたり糞サンプルを集めたりした。ドローンは以前に少しだけ触った時より直感的な操作がしやすく感じた。馬の個体識別は霊長類とは異なりなかなか慣れなかった。馬は木陰で休むときなどは体同士が密着するくらい集まっており彼らの社会的認知は独特で面白いのではと思った。ペネダジェレス国立公園での乗馬は練習などもなくいきなり長距離の散策に出たが、景色も美しく楽しめた。乗って最初の2時間ほどで全員自分が乗っている馬の性格が掴めてくるのも面白かった。



馬(左上)、牛も同じ場所に放牧されている。近くでも逃げようとしない(右上)

ドローン(左下)、馬の骨が丸々残っている。オオカミに食べられたか(右下)。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

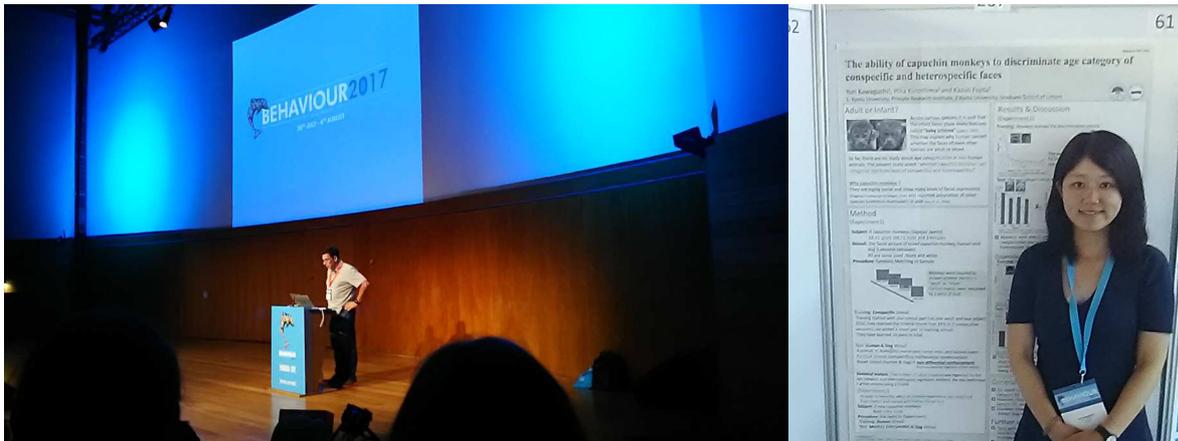
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



ペネダジェレス国立公園での乗馬トレッキング。馬同士
の関係や性格が個体間の距離に出ることも。

＝④Behaviour2017＝

この学会は多くの方が面白いというのを耳にしていたが、予想以上に認知のセッションも多く、時間を
持て余すスロットが一つもなかった。対象動物としては鳥や魚、トピックとしては互惠性や社会学習が
多いという印象だった。今回はポスター発表をおこなったが、コアタイムが二日間あり、10名以上の方
に来てもらった。以前ポスター発表をおこなった IPS の時に比べ、興味をもってじっくりきいてくださ
る方が多いと感じた。私がポスター中に引用もしており、フサオマキザル研究で有名な Ottoni 先生に
も来ていただき、詳しく話を聞くことができたのが収穫だった。すでに訪れたウィーン大学やマックス
プランクの研究者とも話したり食事をもにしたりした。今までは学会中に話をしてもそれっきりとな
ってしまうことが多かったが、IPS のときに知り合った人が私を覚えていてくれるなどしたため、今回
知り合えた人との関係は維持できるように感じた。人脈を作るというのは今回の旅の一つの目標だった
のでその点は非常に満足だった。



Behaviour2017 での様子

＝⑤オックスフォード見学＝

オックスフォードでは野生動物研究センターの狩野博士を訪ねた。彼はハトを対象に集団行動のメカニ
ズムを研究している。自分自身の研究テーマとは少し離れてはいるが興味があり、以前参加した阿修羅
セミナーでの Dora Biro 博士の講演も非常に面白かったため今回の旅程に組み込んだ。

最初に、加速度センサーと GPS を装備させたハトを離れた場所からホームケージへと帰らせる実験を
見学した。ハトを放す場所まで車で 20 分ほどしかも迂回しつつ移動したにもかかわらず多くのハトは
すぐにホームケージへと戻った。あとで GPS で確認してもほとんどのハトは最初こそうろうろするもの
の、その後はほぼ一直線に帰る軌跡を描いた。ハトは、太陽コンパスや磁気コンパス、においやランド
マークなど様々な手掛かりを用いることができるそうだが、車で連れていかれたにもかかわらずどのよ
うに現在地を割り出すことができるのかはやはり理解できなかった。翌日にはハトにビデオを装着し、
ホームケージ周りを飛ばせた。ハトは視覚が狭く後方まで見えるためビデオからハトの視線を正しく理
解するのは難しいようだったが興味深い映像だった。

滞在中、オックスフォードで研究をされている別の研究者 2 名も加わり、Behaviour2017 のポスター
を発表し議論するというインフォーマルな会をおこなった。議論は盛り上がり大いに刺激を受けた。ま
た、狩野博士に 30 近い装置の試作品の写真をを見せてもらったのが印象的だった。私自身は実験の着想
から実際に実施するまでに時間がかかってしまう自覚があるので、試行錯誤をどんどん重ねる態度は見
習わなければと感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



ハトの装置の装着

今までは「フランスの研究グループが…」と聞くのも「ドイツの研究グループが…」と聞くのも具体的な研究者の顔も実験環境もイメージできないため私にとっては同じだった。しかし、ラボを見せてもらってから Behaviour2017 で感じたのは自分が見たラボの研究だと興味もてるだけでなく、実験環境や対象動物などについても正確にイメージできるためその研究により親近感を持てるということだった。また、今回人脈を広げることができたので、今後も維持したい。学会や何かの機会に再会できるのが楽しみだ。

6. その他 (特記事項など)

今回受け入れてくださった Thomas Bugnyar 博士、狩野文浩博士 Christopher Krupenye 博士、馬観察を計画してくださった井上君に感謝いたします。また今回の出張は PWS プログラムの支援を受けておこないました。記して感謝申し上げます。